



地球環境のことをもっと真剣に、もっと身近に考えてもらいたい、そんな想いを込めたコーナーです。

撮影/瀬戸正直(スタジオパッション) 取材・文/丸山泰武 イラスト/大神慶子(P60~62)

地域の環境を考える。



独自のシステムで

読み終わった新聞から広がる、
さまざまなアイデアと可能性

読み終わった新聞紙、どうしていますか？ 最近は、ちり紙交換の声も聞かなくなつたので、燃えるゴミに出している方も多いのでは。福岡の「NPO新聞環境システム研究所」(以下新聞研)は、そんな新聞紙をリサイクルする活動をしている団体です。ただ、その方法はいへんユニーク。持ち込まれた新聞の重さに応じて、「ペパ」という地域通貨と交換。地下鉄や鉄道、バスといった公共交通機関で利用できるという仕組みになっています。

「こんにちは、これお願いします」。集荷場所に次々にやってくるのは、新聞研に会員登録をしている人たち。「今日はきれいな色の服を着てますね」などと気さくな会話をしながら、新聞の束を受け取るのは、新聞研理事の加来陸博さんです。

体重計を使ってその重さを計り、加来さんが取り出したのは携帯電話。会員が持っている2次元バーコードをこれで読み取ってネット上



新聞30キロで30ペパ紙幣1枚と交換。



新聞製のペパバッグ(上)はキットも販売。1セット1,350円(送料込)
TEL 092-662-2226
FAX 092-661-2022
www.pepa.jp



新聞研の加来陸博さん。福岡県内の会員の数は、1,500世帯以上に広がっているそうです。

の資源銀行にアクセスします。画面に現われるのは、会員の個人口座。これにその日持ち込まれた新聞のキロ数を入力します。

新聞1キロが1ペパで、30キロごとに地域通貨30ペパ紙幣を一枚引き出すことが可能。ペパ紙幣一枚は公共交通機関で80円分の割引券として使うことができます。新聞リサイクルの促進と公共交通振興を両立させる独自のシステムです。

「ごみを燃やすのには、1キロ約40円もの税金がかかっています。少しでも無駄なゴミを出さない生活が広まるといいですね」と加来さんはいます。新聞でつくった、ペパバッグでも話題を集めている新聞研。今後の活動にも注目です。